白百合女子大学 児童文化研究センター報 No.45
2018年7月28日

発行　白百合女子大学児童文化研究センター
〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25　TEL 03-3326-7994　FAX 03-3326-1319
http://www.shirayuri.ac.jp/childctr/　e-mail：jido-bun@shirayuri.ac.jp
編集　白百合女子大学児童文化研究センター　印刷（株）南光堂印刷

新センター所長としてのご挨拶

浅岡靖央

二〇一八年四月、前任の白井澄子先生から引き継いで新たにセンター所長を拝命しました。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは、その任の重さを再確認し、自らの戒めとするために、児童文化研究センターのあゆみを簡単にふり返ってみたいと思います。

一九九二年四月　児童文化研究センター発足。
同年　六月　『センター報』創刊。
一九九六年四月　プロジェクト制度開始。
一九九七年三月　『センター研究論文集』創刊。
一九九八～九九年　金平聖之助・冨田博之・光吉夏弥各氏の蔵書及び資料類を受け入れ。
二〇〇四年一一月　各氏の蔵書を、金平文庫・冨田文庫・光吉文庫としてセンター構成員に公開。
二〇〇六年四月　金平文庫・冨田文庫・光吉文庫の外部開架を開始。
二〇〇八～一〇年　科学研究費助成により、冨田氏所蔵の文書資料と新聞記事をデータベース化。
二〇一一～一三年　科学研究費助成により、光吉氏所蔵の目録資料と新聞・雑誌記事をデータベース化。
二〇一六～一八年　科学研究費助成により、光吉氏所蔵の情報カードをデータベース化。

こうしてみると、一九九〇年代に、『センター報』や『センター研究論文集』の刊行及びプロジェクトによる研究の推進といった、今日まで継続されているセンターとしての基本的な活動体制が整えられ、二〇〇〇年代以降、いわゆる三文庫の整備が着々と推進されてきたことがわかります。

あらためて、センターの運営に携わってこられた先生方、さまざまな研究を展開されてきた構成員のみなさま方、さらに膨大な実務を担うことで下支えして下さってきた助教・助手の方々に、敬意と感謝の念を深めました。

そのうえで、今後のセンターがめざすべき方向を、これまでセンター所長を務めてこられた諸先生方のお言葉をふりかえりながら考えてみたいと思います。

神宮輝夫先生が「センターに蓄積された知識や情報など、できるだけ多くの人たちの役に立てるように心がけていきたい」（『センター報』二八号）と記されたように、センターが保有している貴重な資料群を、さらに広く利用していただけるように運営していくことは、ひきつづき大切なことであると言えましょう。白井澄子先生も「センターは、資料の整備・提供を含めた研究支援をはじめ、国内外の研究情報交換のハブ的役割を果たしています」（『センター報』三九号）と書かれています。

一方、研究対象については、宮澤賢治先生が「子供に関わるあらゆる領域を対象として研究をおしすすめて欲しい」（『センター報』三一号）とおっしゃいました。また、石井直人先生は「文学の「文化研究」がさかんになったことや、絵本・マンガ・アニメといったメディアの研究を指向する人が増えたことを考えれば、むしろ、この名前（児童文化研究センター：浅岡補記）こそが重要になっていくのかもしれません」（『センター報』三四号）と示されています。「児童文化」という名称を冠していることに関わって、さらに積極的で建設的な内実を付与していくことが求められているわけです。

そこで、これら先生方のお言葉をふまえて、みなさまのご支援を最大限に期待しつつ、当面のモットーとして、

「さらに利用しやすく！」
「もっとはばひろい研究を！」

の二つを掲げます。いかがでしょうか。

センターのさらなる発展のために、私なりに微力を尽くしていこうと思います。重ねて、どうぞよろしくお願いいたします。

（所長）

センター主催研究会報告

二〇一七年度、児童文化研究センター主催で第五十九回研究会が行われました。ご参加、ご協力いただきました皆さま、誠にありがとうございました。

以下に、研究会の概要と、センター構成員による研究会報告を掲載いたします。

ISSN1345-5400

第五十九回研究会
神宮輝夫氏講演会

講演者　神宮輝夫氏（青山学院大学名誉教授、元本学教授）
題目　戦後のお話ひとつ
日時　二〇一七年十月二十一日（土）十四時～十六時
会場　白百合女子大学　クララホール
挨拶　白井澄子氏（本学教授）
司会　八代華子氏（本学助教）

神宮輝夫先生の講演会に参加して

三井彩愛

二〇一七年十月二十一日、神宮輝夫先生の講演会が行われました。神宮先生は、児童文学の研究、評論、創作、翻訳と幅広く活躍されています。本学では、一九九五年から二〇〇七年まで教鞭を執られていました。

今回の講演会では、プロレタリア児童文学作家の猪野省三が著した『ゆかいなクルクル先生』『化石原人の告白』『夜明けの宇宙堂』の三作品を紹介され、その特色と魅力をお話ししてくださいました。

先生は、彼の作品について「舞台となる戦時中の出来事や世相が、克明に描写されている」ことを高く評価していらっしゃいました。実際に先生が朗読してくださった『ゆかいなクルクル先生』の一節には、「サイレンを鳴らす」「窓ガラスが割れる」など、空襲の場面が生々しく描写されていました。

また、先生は、この作品に登場する植物・鉱物の特徴が、研究的な視野から書かれていることに対しても強い関心を寄せられていました。「出来が良い物語というものはストーリーが良いだけではない。本当のことのように描かれているものです」という先生のお言葉には、作品の価値を見極める大切な視点が集約されていました。

神宮先生の大切なお話は続きます。「人知れず今も輝き続けている作家・作品はたくさん存在する。児童文学の歴史を見直してみると、いかせるものがたくさん見つかってくるはずです」。

私も先生が紹介してくださった『ゆかいなクルクル先生』のような、世の中に眠っている良作を見つけ出し、少しずつ考察を積み重ねていきたいと思いました。「あらゆる資料が資料として面白い」という先生のメッセージを受け止めて、児童文学の魅力を伝承していきたいです。

最後に、私達に向けたメッセージとして「あなたたちも調べたことを、もっと自分らしく押し出していってほしい」というお言葉を賜りました。

この講演会を通して「検証することの大切さ」と「自分らしさを大事にすること」の重要性を学びました。今後の文学作品の研究姿勢について改めて考える良い機会を与えていただいたことに感謝しています。

神宮先生、本当にありがとうございました。

（修士課程二年）

センター構成員活動紹介

小さな仲間たちと

林佳慧

博士課程を修了し十年が経った。思い起こすと、大学院入試の面接では「台湾と日本の児童文学をつなぐ橋渡しをしたい」という希望を述べたが、その役割が少しは果たせているのかなと思う。

博士課程では台湾原住民の昔話における子ども像を考察し、国際研究フォーラムで台湾と日本の昔話の比較研究について発表した。そして、児童文学関係の通訳や翻訳の仕事を頂くこともあった。例えば、小澤俊夫先生が台湾で講演された際には、先生と同じ壇に上がり通訳を務めた。また、台湾の大学関係者や出版社の方が日本の図書館や出版社を訪れた際に通訳を担当した。ともに得難い経験だった。翻訳では、日本の論文のほか、児童書を翻訳する機会を頂いた。一番印象深かったのは、『絵本で学ぶイスラームの暮らし』の翻訳である。日本語をそのまま訳すのではなく、本来の発音やコーラン経やその宗教の文化的背景まで調べた。かなりの時間を要したが、満足いく翻訳ができた。二〇〇七年からは、教育系新聞紙『国語日報』の児童文学版に、昔話に関する連載を始めた。そこでは、日本の典型的な昔話を取り上げ、その語りの様式の研究などを海外の読者に紹介し、良い反響を得た。

結婚後、出産し子育て中心の生活に変わったが、児

童文学関連の仕事と育児を両立させたいと考えている。台湾の育児雑誌に幼児絵本の書評を行う以外に、新聞の駐日特派員として日本児童文学を紹介する新連載も始めた。連載のテーマを探すために、子どもと共に絵本関連のイベントに参加したり、文学館や図書館を訪ねたりした。子どもの好きな絵本から題材を選び、テーマを掘り下げた。

出産後は一人の時間が少なくなったが、小さな仲間が増えたことから児童文学に対する見方も変わってきた。小学生の娘はいつも私が借りてきた絵本を私より先に読み、「この本のこの場面が面白い！　海外に紹介して！」と私に感想を言ってくれる。子どもが面白いと思う場面は大人と異なることもあり、子どもがどういう視点で絵本を読んでいるのか、娘を通して知ることができた。それから、子どもの発想も素晴らしいものである。原稿の締切が間近で徹夜したことを翌日子どもに話したら、幼稚園児の息子は「ママは魔法を使ったから、寝なくても大丈夫だったのね。ママは魔法使いなの？」と言った。台湾の大学で「昔話の比較研究」の講義を行ったこともあり、娘は特別受講生として大学生と一緒に私の講義を聞くことができた。その後、娘が作文で「将来、私もママと同じような仕事をしたい」と書いていたのを読み、子どもたちに良い影響を与えることができたかなと思った。

私はいつも小さな仲間たちからパワーをもらっている。白百合で学んだことが、いまの自分の生活の基盤となり、そして、児童文学の道は子育てをしながらでもゆっくりと続けられることが分かった。

（研究員）

学びの循環、問いの循環を目指して

沢崎友美

私が本学大学院の児童文学専攻に入学したのは、学部時代に所属していた児童文学研究サークルで、創作や評論の面白さを知ったことがきっかけでした。修士論文では、時代も国もさまざまな作品を取り上げ、「自己としての物語／物語としての自己（自己物語論）」という視点から、「児童文学」とは何なのかを考えていきました。今にして思えば、自分の手には余るような大それたテーマでしたが、温かく見守りつつ自由に書かせてくださった石井直人先生には、心から感謝しています。

はじめは児童書の編集者を目指していましたが、修了後は、まず編集技術を身につけようと取扱説明書の制作会社に入社。そこでテクニカルライターの仕事をしつつ、休日に細々と論文などを書くという生活をしていました。けれど五年後、一念発起して転職、杉並区立図書館の嘱託司書に。現在は、五歳の男の子の育児と、仕事との両立に奮闘しています。

こう書いてみると回り道をした感もありますが、実際のところ、「これまで勉強してきたことが、ようやく社会や家庭での実践とつながってきた」という手ごたえがあり、慌ただしくも充実した日々です。職場では主にレファレンス（調査相談）を担当していますが、毎日どんな質問が飛んでくるやら想像もつかないところが刺激的です。また、ブックリストやパスファインダーの作成、児童書の選書など、他にもいろいろな業務に取り組んでいます。

司書は学ぶことそのものが職務といってもよく、外部の研修に参加することも多くありますが、ここ数年での大きな収穫は、「絵本専門士養成講座」と、東京子ども図書館の「児童図書館員のための初級研修プログラム」を受講したことでした。絵本専門士とは、まだできて数年の新しい資格ですが、すでに一六〇名ほどの書店、出版社、教育関係者などが、子どもと本のつなぎ手として活躍しています。私もそのご縁から、書店の絵本コーナーの選書やポップ作成、絵本販売用カタログの紹介文執筆など、思いがけない仕事をいただくことが増えました。また、東京子ども図書館では、引き続き選書に関わらせていただくことになり、新刊を読む締切との追いかけっこをしています。「ある場での学びが、また別の場での実践に生きている」という好循環を感じるときこそ、今の私にとって、何より幸せな瞬間です。

一方、「ひとつの問いをとことんまで突き詰める」という学術的な活動がなかなかできなくなったことが、近年の悩みです。「毎日がフィールドワーク」ともいえる子育てをしていると、子どもにも親にも生きやすいとはいえないこの社会への問いが、尽きることなく溢れてきます。それに、今の子どもたちに読まれている児童書や、それらを扱う大人の手つきにも、あらためて論じられるべき点が無数にあると思えてなりません。

子どもが身近にいるからこそ気づけたそれらの問いを覚えておき、いつかちゃんとした論に練り上げたい。そしてそこからまた、子どもと本の現場で取り組むべき、新たな問いを見出したい――そんな思いを心に留めつつ、今は自分に与えられた仕事に、精いっぱい取り組んでいきたいと思っています。

（研究員）

『紙芝居研究』創刊

中川理恵子

紙芝居を知っていますか。

私は幼い時、公園で、おじさんの演じる「黄金バット」の紙芝居を、駄菓子を買って、楽しんだことがあります。小学校では、紙芝居で交通安全等を学びました。成人してからは子育ての中で、パフォーマンスの道具としての紙芝居や、文学的紙芝居と呼びたい情緒的な紙芝居、観客が言葉や拍手で参加する観客参加型紙芝居、等に出会いました。それぞれ、画のタッチも、演じ方も、環境の整え方も異なっていました。何より、紙芝居の作者や演じ手の目的意識が異なっていたように思います。

現在、紙芝居という言葉から人々がイメージするものは、〈演じ手が、ストーリーに合った連作の画を一枚ずつ見せながら、語る〉というスタイル以外に共通する事がないほど、多種多様なものとなっています。

二〇一六年六月、以前より紙芝居研究を進めていた浅岡靖央教授に声をかけていただき、私も呼びかけ人となり、紙芝居研究プロジェクトが発足しました。

浅岡教授は、紙芝居の歴史や社会への普及、影響に関心を持たれ、現在では入手困難な紙芝居や関係資料を幅広く収集されていました。

一方、私は、乳幼児に紙芝居を実演するボランティア活動を通して紙芝居に興味を持ち、紙芝居だからこそ伝えられる物語や文学的メッセージを子ども達に届けようとしている作品や人々に関心を持っていました。

そこに、これを機会に新たに紙芝居研究に挑戦しようとするメンバー（構成員）が加わりました。

各自研究の入り口や関心は異なりますが、これこそ多種多様な紙芝居を研究するにふさわしく、幅の広いアプローチが可能な研究プロジェクトになりました。

活動としては、浅岡教授の貴重資料を元に紙芝居の歴史や特性の考察、地域の子育てサロンの見学、紙芝居公演の鑑賞、紙芝居出版社の資料室の見学などを行いました。また、フランス・中国・台湾の紙芝居についての発表もありました。

活動が二年目に入った時に、メンバー各自の関心を研究ノートとしてまとめる事を目標にし、二〇一八年三月に『紙芝居研究』創刊号が発行されました。

一枚絵や幼年童話の紙芝居化、台湾紙芝居、についての研究ノートが掲載されています。

日本で生まれた紙芝居は、近年、徐々に研究が増え始め、海外でも研究されるようになりました。

紙芝居は、画と脚本だけでは完成しません。演じ手と観客が加わりはじめて紙芝居が存在するのです。同じ作品であっても演じ手や、演じる場所によって全くイメージが変わる事があります。これは、演じ手が、どの作品を、どのように演じるのかというだけでなく、演じ手と観客が向かい合い相互に刺激し合って、その時だけの、たった一度の紙芝居世界が出現するライブ感覚が、紙芝居の大切な要素であるからです。

この特徴を持つ紙芝居を研究するには、さらなる新たなアプローチが必要です。今後、新たな研究方法を開拓する事なども視野に入れて活動していきたいと考えています。

（研究員）

科研費作業中間報告

二〇一六年度に交付が決定した平成二十八年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）をもとに、光吉夏弥所蔵資料の公開に向けて、整備を進めています。

今回も、前号に引き続き、この作業を実際に行っていただいている大学院生に作業報告をお寄せいただきました。

◆若谷苑子

現在、私は光吉夏弥先生が遺されたカードのスキャン、および光吉文庫で所蔵している図書との照合を行っています。

カードには、作家や画家の著作・関連書籍が一覧となっているものや、キーワードを立ててその関連書籍が一覧となっているものがあります。世界各国の児童書等が掲載されているカードを一枚一枚手に取りながら作業していると、「児童文学」と呼ばれる世界がいかに大きいものであるのか身をもって体験できます。

さらに、翻訳書に関するカードからは日本における海外児童文学の需要状況の一端を見ることもできます。一つの書籍の翻訳情報が一覧になっているカードの場合、どのような形態やジャンルで日本において出版されたかを知ることができます。新聞や雑誌の切り抜きが貼付されているカードの場合、紹介文であればその本がどのようにアピールされていたのか、書評や読書感想文であれば当時のその本に対する声を知るこ

とができます。

手に取るごとに発見をもたらしてくれるカードの情報を人々が手にする助けになれるよう、作業を進めていきたいと思います。

（博士課程三年）

◆三池洋江

光吉夏弥先生が作成した書誌情報カードとそのカードに対応する書籍をリンク付けする作業を行いました。また、カードをスキャンし、カード画像を保存する作業も行いました。

書誌情報カードには、主に英語圏を含む様々な国の作家名、画家名が標目として記載されています。書誌情報の内容は、作者・画家の原著の他に、翻訳作品、作家・画家の情報が載る研究書、作品の紹介文を含む新聞の切り抜き等多岐にわたるものです。印字された情報だけでなく、訂正を意味する文字や、削除を示す波線、付加情報が手書きで付与されているカードもあります。手書きの文字を見ることによって、実際にこれだけの膨大な情報をまとめた研究者の存在を実感できます。光吉夏弥を研究する方にとっては、このカードそのものが、光吉先生の研究活動や考えを辿る貴重な資料となります。その一方で、カードに書かれる情報は、児童文学を研究する者からみても有効な材料となります。光吉先生のカードは、光吉先生自身の研究足跡に留まることは決してなく、未来の研究者に継ぐべき遺産です。光吉先生と光吉文庫の利用者を時を越えて繋ぐ作業に携わらせて頂いていることに感謝しております。

（博士課程三年）

プロジェクト活動報告

児童文化研究センターは、センター構成員による研究の促進を目指して、プロジェクト制度を設けています。二〇一八年度は、次の五つのプロジェクトが活動しています。

小波日記研究会（小波日記を読む）

（研究代表　猪狩友一）

巖谷小波日記（センター所蔵資料）の翻刻・研究を継続しています。二〇一七年度は、明治三十八年の日記を読み進め、また三十七年十月～十二月の翻刻と注釈を「児童文化研究センター論文集」に発表しました。明治末の新聞には、子供たちが小波の「世界お伽噺」などを愛読していると、「お伽噺の全盛」を伝える記事が見られます。日記の内容からも、そうした時節の到来が窺われます。二〇一八年度も引き続き、およそ月一回のペースで研究会を催し、明治三十八年の日記・手帳を読んで参りたいと思います。

近現代児童詩歌研究

（研究代表　宮澤賢治）

本プロジェクトの活動成果をまとめた『児童詩歌』は、十四号となりました。第一号から続く「賢治と童謡」も十四回目の連載となり、今回は「あまの川」について、書簡を検証しながら賢治の謡心を解明しています。「相馬御風の童謡――童謡集『銀の鈴』」は児童文学者としての御風の童謡観、子どもに対する考え方を検討しています。「中川ひろたかの「あそびうた」研究」（三）は、楽譜集『ちびっこくらすのあそびうた』の作品を考察して、子どもと劇遊びについて言及しています。

また加入メンバーによる口頭発表があり、今年度の『児童詩歌』と近現代の児童詩歌研究に新風が吹き込むよう期待しております。

紙芝居研究

（研究代表　浅岡靖央）

昨年度は、研究会をほぼ毎月一回開催し、参加者それぞれの関心から、さまざまなアプローチによる研究のあり方を模索していきました。また、紙芝居出版に携わっておられる童心社を訪れ、その資料室で過去から現在に到る厖大な紙芝居作品に触れる機会も得ました。そして、当初は共同研究を予定していましたが、結果的には個別の研究成果を中心とする冊子『紙芝居研究』を創刊することができました。

三年目を迎えた今年度は、参加者各自がさらに個別の研究を深めていき、『紙芝居研究』第二号に発表する予定です。

ネオ・ファンタジー研究会

（研究代表　井辻朱美）

本プロジェクトでは、ネオ・ファンタジーに関連する論文の精読・研究発表・意見交換などを通して、ネオ・ファンタジー及び関連分野への理解を深め、新たなアプローチの方法を模索していきます。

二〇一七年度はネオ・ファンタジーについて俯瞰的にまとめられた論文と、ネオ・ファンタジーの起点ともされる「ハリー・ポッター」シリーズに関する研究書を扱いました。

二〇一八年度は日本のネオ・ファンタジーについて扱う予定ですが、具体的な作品・作家・テーマなどは参加メンバーの興味・関心に合わせて決定します。

あまん・立原・安房作品研究

（研究代表　石井直人）

昨年度は、安房直子作品に関する日本と中国の書評や論文等の資料を収集し、書誌情報のリスト化と内容の読み取りを行いました。その結果、日本の安房作品に関する資料については、各作品別の資料の数や、資料の執筆者と執筆者別の数が明らかになりました。また、中国における安房作品の受容を考えるために必要な、中国の重要な先行研究の発見とその解釈を行うことができました。

上記の結果を踏まえて今年度は、安房作品に関する書評を再解釈し、文章にまとめることを目標とします。また、あまんきみこ・立原えりか作品に関する資料の収集も行います。

センターからのお知らせ

センター主催第六十二回研究会「ハンス＝イェルク・ウター氏講演会」

ドイツの著名な口承文芸研究者であるハンス＝イェルク・ウター教授が来日される機会に、講演会を開催いたします。どうぞご参加ください。

題目　ラプンツェルのすがた
　　―「ラプンツェル」メルヒェンの解釈と意味―
　　（ドイツ語講演、逐次通訳あり）
日時　二〇一八年十月二日（火）
　　十六時二十分～十七時五十分（十五時五十分受付開始）
会場　白百合女子大学　一三〇八教室
申込　参加をご希望の方は、九月二十五日（火）十七時までに、児童文化研究センターへ、メールか、ファックスで申込をお願いいたします。
　　メール：jido-bun@shirayuri.ac.jp
　　ファックス：〇三―三三二六―一三一九

※夏期閉室期間中は、申込受付業務を行っておりませんので、ご注意ください。申込多数の場合は、お断りさせていただくこともございます。

灰島かり先生寄贈書設置

二〇一六年六月十四日にご逝去された灰島かり先生がご寄贈くださった和書と洋書を児童文化研究センターに設置しました。灰島先生は、二〇〇三年度より二〇一五年度前期まで本学文学部児童文化学科（当時）の非常勤講師を務められました。

構成員研究発表会

児童文化研究センターでは、主催研究会のひとつとして、二〇一二年度から、「構成員研究発表会」を開催しています。児童文学専攻の博士課程に在籍する三年生を中心に、博士課程学生が研究発表をしています。

今後も毎年開催していく予定です。開催日時や会場につきましては児童文化研究センターホームページなどでお知らせいたしますので、興味のある構成員の方はご参加ください。

センターブログ

二〇一一年四月、児童文化研究センターブログが、児童文化研究センター公式サイト内に開設されました。構成員による気軽な研究発表、また、本学大学院や児童文化研究センターの紹介を目的としています。

現在、主に児童文化研究センター主催研究会のお知らせ、児童文化研究センター閉室のお知らせ、学内の四季折々の様子を掲載し、公開しております。

当ブログには、大学院生をはじめとする構成員に積極的に書いていただきたいと考えています。児童文学・文化関連の新刊書・映画・展覧会・講演会の感想・紹介、プロジェクトの活動紹介、日々の研究活動の様子、近況報告、等、投稿内容は自由です。

構成員の方で、執筆してみたいという方がいらっしゃいましたら、お気軽に助手にお声がけください。

ブログ：http://jido-bun.blogspot.com/

センター構成員一覧

（二〇一八年七月現在・敬称略）

所長
浅岡靖央

運営委員
浅岡靖央　石井直人　井辻朱美
白井澄子　間宮史子
森下みさ子　やたみほ

所員
浅岡靖央　猪狩友一　石井直人
井辻朱美　白井澄子　間宮史子
森下みさ子　やたみほ

客員所員
小澤俊夫　神宮輝夫
松井千恵　宮澤賢治

助手
八代華子　酒井志麻
金子真奈美　髙原佳江

客員研究員
生駒幸子　西村醇子

委嘱研究員
木村八重子　竹田修

研究員
石元みさと　伊藤かおり　伊藤敬佑
遠藤知恵子　尾崎るみ
岸野あき恵　倉田恵理子
佐々木江利子　佐々木裕里子
沢崎友美　志村裕子　鈴木あゆみ
鈴木宏枝　鈴木律子
寺田綾　中川理恵子　永島憲江
浜名那奈　宮崎麻子　山本麻里耶
林佳慧　和田啓子

準研究員
安達愛　黒川夏帆　南口菜々

院生（博士課程）
アハマドヒスブラー
グラントゥ、カトゥリーナ
五井結基　小林夏美　西村明恵
半田涼太　深民麻衣佳　三池洋江
山越夢子　劉冠玟　若谷苑子

院生（修士課程）
大西香里　小川千晶　神永静香
孔阳新照　谷口あゆみ　中島菜穂
西野美菜　沼本知自
政氏裕美　三井彩愛

編集後記

二〇一八年四月、白井澄子前センター所長に代わり、浅岡靖央教授がセンター所長に就任いたしました。

新センター所長のもと、今後ますますセンターの事業の充実をはかり、児童文学・文化研究者の皆さまの研究、発表、交流の場として発展していきたいと考えております。

日頃ご高配をいただいております皆さまにあらためてお礼申し上げますとともに、より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（八代・酒井・金子・髙原）

児童文化研究センター
夏期開室予定日

～7月31日(火)	9：00～17：00 (平常開室)
8月1日(水)～9月20日(木)	閉　室
9月21日(金)～	9：00～17：00 (平常開室)

『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集22』原稿募集

児童文化研究センターでは、児童文学・文化研究の活性化を目的として、年に一度、研究論文集（査読制）を発行しています。二〇一八年三月には、第二十一号を刊行し、投稿原稿の中から、四編の論文と二編の研究ノートを掲載しました。刊行された研究論文集は、児童文学・文化関連の研究者及び研究機関等に寄贈しています。研究成果を発表する場として研究論文集をぜひご活用ください。

つきましては、以下の要領で『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集22』（二〇一九年三月発行予定）の原稿を募集いたします。ご投稿をお待ちしております。

締切

二〇一八年九月二十五日（火）午前十時必着

提出物

① 表紙（論文題目、氏名、構成員の身分、郵便番号、住所、メールアドレス、文字数、投稿区分（研究論文／研究ノート）、申告事項（あれば）を記載）

② 本文（参考文献、注、図、表等を含む）

③ 論文要旨（300字以内、論文題目を併記）

④ 欧文要旨（採用決定後、100 words以内で提出。欧文題目を併記）

以上、①～③について、プリントアウト各一部及びデータを提出すること。

提出先

〒一八二―八五二五
東京都調布市緑ヶ丘一―二五
白百合女子大学　児童文化研究センター　宛

データの送付先

〈takahara@shirayuri.ac.jp〉
研究論文集担当　髙原佳江

審査規定（センター規定より抜粋）

＊ 研究論文集審査のための編集委員会を設置する。

＊ 編集委員は所長が依頼した、本学専任教員またはそれに相当する者から構成される。

＊ 投稿原稿は編集委員会の審査を経て、許可されたものが掲載される。

投稿規定

一. 執筆者は原則として児童文化研究センター構成員とする。

二. 児童文学・文化に関する研究論文、研究ノートを対象とする。

【研究論文】先行研究に加えるべきオリジナリティーのある研究成果が明確に述べられているもの。

【研究ノート】資料の紹介・精査、論点・仮説の予示、既存の仮説の検証作業、研究の中間報告等、優れた研究につながる可能性のある内容が明確に記述されているもの。

三. 投稿に際して、審査を希望する投稿区分を明記する。ただし、審査結果によって、区分は変更されることがある。

四. 表紙、本文、論文要旨、欧文要旨はマイクロソフト社のワードで提出する。

五. 本文のフォントサイズは10.5ポイント、用紙サイズはA4判、文字数と行数は40字×30行となるように設定する。縦書きの場合、用紙の向きは横とする。本文の枚数は20枚以内とする。

六. 参考文献及び注は本文末に一括する。

七. ページ番号を本文の中央下に付す。

※ 書式の細部については*MLA Handbook*最新版及び過去の研究論文集を参照のこと。

審査結果発表

二〇一八年十月十一日（木）〈予定〉

注意事項

a. 完成原稿を投稿する。

b. 原則として、数字は、横書きの場合は半角英数字、縦書きの場合は漢数字を用いる。いずれの場合も半角カタカナを使用しない。

c. 特殊記号、飾り文字、不必要なスペース等をなるべく使用しない。

d. 図版、写真等を掲載する場合、執筆者の責任において、あらかじめ著作権者から許諾を受けるものとする。

e. 画像は鮮明なものを使用する。高度な印刷技術を必要とする場合は、実費自己負担となることもある。

f. 学会等で口頭発表したものを投稿する場合は、その旨を本文末に記載する。

g. やむなく投稿規定を逸脱する場合は、その旨を表紙に記載して申告する。その内容は編集委員会で審議される。

h. 採用した原稿についての著者校正は初校、再校のみとする。著者校正での誤字脱字以外の加筆修正は原則として認めない。

i. 不明な点については、研究論文集担当者に問い合わせの上確認する。